「日々の理科」（第 3528 号） 2024,-4,-4

「青春１８切符・日帰り大旅行（16)」

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所

田中　千尋　Chihiro Tanaka

大糸線は本来、北アルプスの展望路線と言っても良いほど、車窓景観の美しい路線です。しかし残念ながら、御殿場線や身延線では持っていた天気が、このあたりでは悪くなり、山がよく見えませんでした。すでに日本海側の気候区に入ろうとしているのです。

しかしこの山だけはよく見分けがつきます。安曇野からもよく見える「有明山」です。有明山（ありあけやま）は北アルプスの前衛とも言える山で、標高こそ 2268M と低いのですが、このあたりでは珍しい独立峰で里にも近いので目立ちます。その山容から「有明富士」「安曇富士」といった呼ばれ方もしています。

列車はフォッサマグナの西の縁、安曇野をひた走り、「信濃大町駅」に到着しました。名の通り、大糸線沿線では松本に次いで大きな町で、かつては新宿から信濃大町行の急行列車もありました。

しばらく走ると、左車窓に湖が見えます。実は列車の車窓から湖が近くに見える場所は意外に少なく、これも大糸線の魅力の一つです。最初に見えるのが「木崎湖（きざきこ)」です。この湖は、フォッサマグナの西縁の構造線（糸魚川-静岡線）上にある「構造湖」の一つです。同じように南北に３つの湖「仁科三湖」が並んでいて、南（下流）から「木崎湖」「中綱湖（なかづなこ)」「青木湖（あおきこ)」となります。

この３つの湖は川で結ばれていて、一番下流（南側）の木崎湖から流れ出した水は「高瀬川」となり安曇野を潤します。その後、「犀川（上流は梓川)」と合流し、最終的には信濃川を経て日本海に注いでいます。

真ん中の「中綱湖」は大糸線の車窓からはよく見えないのですが、「青木湖」はよく見えます。このあたりまでくると、いよいよ分水嶺が近づき、雪の量も多くなってきました。地上に積もっている雪だけでなく、車窓には降ってくる雪も見えるようになりました。列車は１分も遅れていませんでしたが、私は終点の南小谷ですぐに折り返して、この日のうちに東京に戻る予定です。雪が少し心配になってきました。